

ベンジャミン・リー・ウォーフと「学際」

～言語の輪郭をめぐる問題について～

水島久光

Benjamin L. Whorf and "Interdisciplinarity"

~On the Question of Language Contours~.

MIZUSHIMA Hisamitsu

Abstract

This paper liberates Benjamin Lee Whorf's thought, which has been discussed as "linguistic relativism", from the framework of the genealogy of linguistics linked to Edward Sapir and George Lakoff, dispels the unjustified evaluation that it is merely "a hypothesis of the past already rejected," and reexamines its originality and modernity.

As an amateur researcher, Whorf's free sensibility was to redefine "language" as a mediator between science and metaphysics, and to draw a map of thought that questioned the relationship of the subject to the world and the universe. Unfortunately, he died too young to give form to this vision. However, his interdisciplinary ideas not only encouraged a departure from Western-centeredness, but also suggested the possibility of a "semantics" beyond "language" for those who suffer from communication barriers due to disabilities, different cultures, and disparities. It has the potential to expand into a theory that contributes to the construction of an "ethic of care" for a new era.

0. はじめに

本論のテーマに行きつきたきっかけは一冊の本との出会いにある。天島大輔『しゃべれない生き方とは何か』(生活書院、2022)——著者は14歳の時に経験した医療ミスで重度の障害を負う。不随意運動により言葉を発せなくなったことで環境から遮断され、意思の疎通が封じ込められたのちに、独自のコミュニケーション方法「あ、か、さ、た、な話法」の開発によって研究者としての「生き方」を見出し、自己言及的に問いを立てる。その姿勢は衝撃的であった。

天島の問いは彼を支える介助者との関係性を容赦なく掘り下げ、その結果(障害者であるか否かに限らず)、人間の思考、あるいは存在自体の「多己決定性」に行きつく。それはヒューマニズムの問題——特に近代的理性の超克という根源的な課題において、一つのあり得べき道を

拓くものだったといえよう。しかし「コミュニケーション研究」の視点から見ると一気にそのレベルに降りていく前に、立ち止まらずにはいられないステップがあるように思えた——それは「言語の輪郭」という問いである。

天島や、彼が影響を受けたと名指しする（同じ重度障害を持つ研究者である）福島智らが自らの道を切り開いた手段は¹、語弊を恐れずに言えば、あくまで彼らが一定の発達段階を経たのちに身体機能を損なった経歴故に可能であった、すなわち「言語能力」の修得後だったからこそその方法であった。福島は仮に発達段階の初期において重度の視聴覚障害があった場合（福島は「盲ろう児」と定義する。またここでは知的障害は除く）、その思考と言語との関係は、自身の経験とは全く異なったものになっていた可能性を認めている²。

ここで指摘された言語習得と外部情報との関係は、障害者の社会参加というプラクティカルな問題に限らず、そもそもの「言語」という概念自体にゆさぶりをかけるものである³。ルーマン的な二値コードをここに当てはめるならば、「言語」のシステムとしての機能は「伝わる／伝わらない」という次元において一般化できる。そのようにしてパースペクティブを広げることが、天島や福島が訴える「多様な主体による社会参加」の扉を開いていく道につながるのではないか——例えば、文化や歴史、様々な現存する社会的格差・隔たりに橋を架けるコミュニケーションの構想という切実な課題が、とかくナイーブなSDGs的スローガンに回収されてしまう今日的リスクを避けるためにも、そこへの注目は不可欠なステップであると思えるのだ。

本論は、その出発点をベンジャミン・リー・ウォーフの「言語」に関わるいくつかの思考実験に置く。その仕事は「言語的相対論」「サピア＝ウォーフの仮説」として知られてはいる。それは「言語はその使用者の宇宙観や世界観（思考）の形成に関わる」という考え方で、両者の論考が発表された1930～50年代に注目された。この思考と言語、そして現実認識との関係は、母語とことなる言語に出会った時に誰もが経験的に認める現象の中にあり、一時期幅広い分野で引用されたものの、現代では実証の困難さあるいは「論理的」矛盾があるとして否定され、文化記号論や語用論・音韻論など言語学の発展に寄与こそしたものの、系譜学的に既に「過去のもの」となったとの断定が大勢を占めている。

だが本論では、この評価は不当なものであると考える。なぜなら改めて天島や福島の実力がわれわれに示唆することがらを、そもそもの「言語」の自明性を崩すトリガーであると解釈するならば、その点において再考が促されずにいられないからだ。そのためには、ウォーフがサピアから継承したものよりも、彼のテキストの内にある独自のアイデアに注目し、救い出すことが要求されよう——彼は「言語」というカテゴリーに、「学際」の契機を見出すという、大きな問いを立て、その入り口に立っていた⁴。そしてその問いは、今日の「ケア」社会を支える理論を拓く、可能性に満ちているのである。

1. 「言語的相対論」の現代性

1-1 ウォーフの数奇な人生

ベンジャミン・リー・ウォーフは、短いながら極めて数奇な人生を送った人物である。唯一

の論文集“Language, Thought, and Reality”（邦訳『言語、思考、現実』）の編者であるジョン・B・キャロルの人物紹介によれば、その本業は保険会社の火災防止検査官であり、生涯その会社に所属する「在野の研究者」であった。彼が自身の論文「習慣的な思考および行動と言語との関係」で語る「空のガソリン缶」に関するエピソードも、業務の現場での素朴な疑問が発点になっている⁵。つまり彼の「言語」への関心は学問的なものというよりも、日常における意思疎通の失敗・もどかしさが開いたものであり、探求の手続きにおいても、検証された手続きに則ったものというより、ヒューリスティックな直観にしたがった独自性が目立つ⁶。

実際、彼の「言語的相対論」と言われる「方法」は、理論として一般化される前に、彼の44年間の人生を終えねばならなかった運命によって、中断せざるを得なかった——だがもとより、彼が理論として一般化を志向していたかどうかは、はっきり言うことはできない⁷。このラベリングに根拠を与える「言語的相対性」という概念は、彼自身によって積極的に打ち出されたものではなく、「サピア＝ウォーフの仮説」という呼び名自体も誤解を生じさせる。そもそもこの二人で共同研究を行った事績はなく、強い影響は受けたにせよ、ウォーフはサピアに直接師事する関係ではなかった。すなわちこの名は後世において与えられた、極めて恣意的な「括り」であると言える⁸。

本論は、まずその「括り」「ラベル」を解くことから始める。そして、彼が直接表した「言葉」の中に、彼自身が「空のガソリン缶」と「ホーピ語研究」を結びつけるに至ったイメージ・スキーマを探り出したいと考えている。おそらくそれによって“ウォーフは「言語」それ自体を主題化してはいなかった”、という新たな仮説が浮かび上がるだろう。逆に彼は「言語を異化すべき」迂回路を設定し、それによってその意味機能を基礎づける、実存的水準を見出そうとしていた。当然その動機は、制度化された学問の枠組みとの間に齟齬を生む——だがその軌轢にこそ「学際」という今日的課題の扉を開く鍵が潜んでいるように思えるのだ。

1-2 言語論的転回と「言語学」の閉じ

20世紀哲学を、言語論的転回との関係で論じきってしまうのはやや抵抗があるが、少なからず現象学の問題提起や、ソシュール以降のポストモダンの論調が、そのムーブメントの影響下にあったことは否めない。これらの様々な動向に共通するものは「ヨーロッパ」的なものに対する批判的な眼差しと言ってよいが、個々の論者の態度は一様ではなかった。その中で最も悲観的であったのがロラン・バルトに代表されるような「言語に対する恐れ」であるとするならば⁹、その対極に位置づけられるのが、言語学者たちの「過剰な自意識」であるといえる。

「言語学」というディシプリンをどのように捉えるかという論争が、その象徴であった。きっかけはノーム・チョムスキーの『言語理論の論理構造』（1955）を端緒とする「生成文法」の提案であるが、その「普遍的言語機能の生得性」を仮定した推論のラディカルさは、様々な賛否の渦をまきおこした。そのなかでもジョージ・レイコフらが1970～80年代に、彼らを仮想敵として自らの「認知言語学」のセオリーを立てていったことにより、「言語学」はこの二派による“Linguistic War”として捉えられるに至る¹⁰——この対立は、レイコフ自身の弁によれば、「客観主義 vs 相対主義」として図式化されるが、実は、その自ら（後者）の立場であると

ころの後者の嚆矢として、ウォーフが位置づけられているのだ¹¹。

本論では、レイコフらのこの「賞揚（持ち上げ）」が皮肉にもウォーフの今日の不当な評価につながっている可能性を指摘したい。すなわち、ウォーフの仕事を本来彼が意図していなかったメタファーの理論を基点とする「言語学」の枠組みの中に、レイコフらは切り詰めてしまったのである。もちろんレイコフらの「認知言語学」は、認知科学的知見を動員することによって、言語を運用の次元から捉え直すことを提案した点において画期的であった。しかしそれも「言語」の外から、その機能を対象化するものではなく、意味論から語用論に軸足を広げることで「言語」概念の射程を広げ、ディシプリンの拡張を目指したものとみなすことができる。極論すれば、この論争も「言語学」に閉じた“コップの中の嵐”以上のものではなかった。

表現は適切ではないかもしれないが、ウォーフはその「道具」に使われ、その主張は矮小化された感がある——その鍵は、レイコフがいう「相対主義」の定義の中にある¹²。

1-3 ふたつの「相対主義」

レイコフはサピアとウォーフに謝辞を述べたマーク・ジョンソンとの共著『レトリックと人生』（1980）において、チョムスキーらの「客観主義の神話」の系譜と自身たちが対立するアプローチを執ることを宣言する。が、この段階では客観主義に直接的に反する主観主義でもない「第三の選択」を行うというだけで、「相対主義」という自らの立場は明確にしない¹³。それをはっきり提示するのが『認知意味論』（1987）であり、とりわけ第18章「ウォーフと相対主義」でそれをはっきり述べるに至る。

この大著の理論編（第一編 機械を超える精神）は自説（認知意味論の説明：第一部 カテゴリーと認知モデル）と正当性（客観主義への批判：第二部 哲学的な意味合い）を述べる構成になっているが、その後半三分の二の位置においてウォーフは登場する。まずレイコフは「今世紀の最も著名な相対主義者、ベンジャミン・リー・ウォーフ」（p.370）と「持ち上げた」上で、「概念的相対主義についての理に適った議論にはいる前に、この議論をとりまく過度の感情論をいく分なりとも静めておくことが重要である」（p.370）という。なぜならば「相対主義の問題がなぜ痼癩を起させる可能性があるのか…概念的相対主義が道徳的な相対主義と混同され、それ故、そもそもどのような相対主義も、倫理的行為の普遍的な基準の可能性を否定するものとみなされるからである」（p.398）

すなわちレイコフは「いわゆる相対主義」には、概念的レベルと道徳あるいは倫理的レベルの議論があり、後者を退けることによって、概念体系の議論に絞り込むことを意図していた。ここで言う概念体系の議論の中心は「通訳可能性／不可能性」にある。その精緻化を図ることが、本書におけるレイコフの狙いであり、ある意味ウォーフはそのために俎上に載せられたといえる。だがここでレイコフは手のひらを反す。「ウォーフは事実に関しては確かに相対主義者であった。彼は、諸言語は、実際に、さまざまに異なる通訳不可能な概念体系をもっていると信じていた。しかし、価値に関しては、彼は客観主義者であった。彼は客観的現実が存在するということを信じていた」（p.396）。

そしてレイコフはウォーフの相対主義は部分的なものであることを指摘する。「彼は語彙や、

専門用語、曖昧な概念を表す語などに関心を持ってはいなかった。彼に関心を持っていたのは、空間、時間、因果関係、自称構造(event structure)、相、証拠性(evidentiality)、基本的な事物の分類などといった、われわれの概念体系の中心に及ぶと彼がみなしていたような基本的概念であった」(p.402)——だからこそ、自分たちはウォーフから出発し、「変異の程度」「変異の深さ」「変異の性質」「体系の能力の対比」「概念組織」「変異のありか」「機能的身体化」「通訳可能性」「事実と価値」「行動に与える効果」「制御」「倫理」という項目を立て、その徹底の度合いを検証するのだという。

しかしレイコフの結論としては、「ウォーフは、実際の言語形式—形態素、語、文法構造—を概念体系における変異の位置とみなしていたようである。彼は思考や行動を決定する言語という言い方をし、言語的相対性という言葉を使っていた」(p.402)——すなわち、ウォーフは「言語」機能の領域を限定的に扱っていたというのである¹⁴。

2. ウォーフがやり残した仕事について

2-1 「科学」と「形而上学」の結び目

ウォーフはこうして、言語学の“コップの中の嵐”に引き込まれた結果、不十分な相対主義理論であるとしてレイコフによって更新され、再び過去のものとして葬られたと言ってよい¹⁵。しかし逆説的にこの扱いを検討するならば、むしろそこにこそ「言語学」の文脈に狭められたからこそ見えにくくなっていた「ウォーフの問いの現代的な意義」を浮かび上らせる可能性があるといえる。というのは、まさにウォーフは「空のガソリン缶」を巡る意味の取り違えに強く反応してしまう一般市民であったからである。

ウォーフは初期の論文の冒頭でこのように書く。「ホーピ語とホーピ族の文化には一つの**形而上学**が秘められているわけであり、この点空間と時間についてのわれわれのいわゆる素朴な見方とか、相対性理論の場合も同様である」(「アメリカ・インディアンの宇宙像」1936、p.14)。ここには二つの驚きがある。まず、ここに「形而上学」という言葉が用いられている点に注目したい。それはヨーロッパ近代思想史を貫く批判の対象としての「形而上学」というカテゴリーではなく、晩年のインド哲学への関心にもつながる彼の根底にある神知論的宗教心とのかかわりに根差したものである¹⁶。もう一方でここに「相対性理論」への言及がある点も見逃せない。実際、「相対性理論」への関心はいくつかの論文(「習慣的な思考および行動と言語との関係」p.127、「言語と精神と現実」p.191など)で確認することができる¹⁷。

この一文に表れた、「われわれの時代の最も革命的な思想家」(p.191)たちの新しい科学へのシンパシーとある意味「神的」な第一原理を求める「形而上学」の結びつきから、彼の言う「相対性 (relativity)」のニュアンスが見えてくる——それはレイコフが言うように「言語学」における客観主義への対立項としてのそれに止まらず、いささか粗削りな構想に過ぎなかったかもしれないが、「世界」「宇宙」を理解するに至る道の多様性を認めるという広い教養主義的モチベーションに根差したものだ。それはウォーフの「ヨーロッパ言語＝西欧的思考法」への批判のあり方にも表れている。それはその限界を指摘し超克すべきものとしてではなく、他

の民族との比較において(まさに文字通り)「相対化」する(それもあがるが、別の道もあると示す)姿勢にあり、その仮想的全体の中に改めて位置づけなおす必要性を訴えたものだった。

「一つの実体論の世界——より高次の超空間の世界——が諸科学によっていつの日か発見されるべく存在しており、諸科学はそれによって結びつけられ、統一されるであろうということ、しかも、それはパターン化された関係 (patterned relations) の領域というその第一の様相において存在しており、その関係の多様性は想像を絶するものがあるが、一方では言語(その根底においては数学や音楽など、究極的には言語と同類のものも含む)の豊富で体系的な仕組みと、十分見てそれと分かる程度の親近性を有しているということ、である」(p.191)——この言明の中における「言語」の位置に改めて注目したい。すなわち彼はそれを主題ではなく、あくまで媒介的なファクターとしてみなしていたのである。

2-2 「世界」における「言語」の位置とパターン性

言い方を改めるならば、ウォーフの「言語的相対論」は、あれこれの個別「言語」に内包される相対性を謂うものではなく、「言語」一般の存在を外から相対論 (relativity) 的に位置づけなおす試みであり、「言語学」の“コップの中の嵐”における「相対主義」とは異質の発想のもとにあったと考えるべきだろう。すなわち彼の関心の軸は、「世界」「宇宙」を構成する「物質」「現象」「時間」「空間」の意味解釈の方にあり、ゆえにヨーロッパ言語と異なる射程をもって(形と連続体として:p.118)それらを捉えたホーピ語などの諸言語を「素材として」収集したのである。

編者のキャロルは、『言語・思考・現実』に纏められた論文のうち、1939年の「習慣的な思考および行動と言語との関係」が学術的な試みとしての集大成であり、それ以降の晩年の4本(邦訳では3本)を「専門家ではない読者を対象としたもの」(p.267、282)¹⁸、すなわち啓発的な位置づけのものとして評価している。しかし本論ではむしろそうではなく、ウォーフとしてはここから本格的に、前者において収集された素材をもって、その先の「名前は与えないでおきたい」(p.191)とした壮大な構想への概念の布置を描く作業に踏みだしていこうとしたのではないかと考えたいのだ。

実際に1940年から41年に書かれた論文では、この「言語」の位置を相対的に見定める思考実験が重ねられている。「科学と言語学」(1940)では「言語学」と他の諸科学との関係を示し、そのうえで「言語」の(「意見の一致に到達する手段となる」p.152)「過程」としての優越性が主張される。また「言語と論理」(1941)では、とはいえその「言語」の機能は絶対的なものではなく、その背後にある伝統的概念たる「精神」の存在の蓋然性が仄めかされる(p.176)¹⁹。こうした「言語」の位置、あるいは「言語」の機能を支え、超えるものとの配置が整理され、示されたものが最晩年の論文「言語と精神と現実」である(1941)。

この論文で極めて興味深いのは、明確に「物理的」な世界を「言語的な現象」の「下」に位置づけ(p.193)、その界面(インターフェイス)に注目する姿勢を打ち出す一方で²⁰、その上層に「もっと高度なもっと知的な精神」(p.209)の領域を想定している。そしてその間を媒介するものとして「言語や心理に関する現象」が存在しているというのだ。「思考」「こころ」は

この中間領域において過程的(すなわち動的)に働く——そして、その構造原理に「パターン」という概念を「真に宇宙的な規模で基本的なもの」として導入する。

ウォーフは言う「全体はパターンによって構成される」「それはちょうど心理学で言うゲシュタルトのようなものであり、小さい全体はそれより大きい全体につぎつぎと包含されていくのである。したがって、宇宙の姿というのは系列、ないしは階層的な性格のものであり、いくつもの面やレベルが相ついで現れてくる」(「言語と精神と現実」 p.192)。この秩序を彼はコードという——「その合意はわれわれの言語社会全体で行なわれ、われわれの言語のパターンとしてコード化されているのである」(「科学と言語学」 p.153)。

2-3 「言語学」と諸学の関係

「このような系列的な秩序の認識を欠いているがために、さまざまな学問が世界からいわば断片ばかりを切り取っているという有様である」(p.192)——ウォーフは各論文のそのここので「数学」「物理学」「幾何学」「代数学」と、言語との関係を指摘しているが、それは各々のディシプリンがそれぞれに対象にパターンを見出す方法を有しているからである。しかしそれらにはいずれも言語の形式的側面との相関がある。まさにその関係性上に、「意味づけを行う」人間の行為の、言い換えれば「こころ」「思考」の普遍性を見ることができる。

この普遍性こそが諸学を結びつけるものである。ゆえに仮に「宇宙に系列的ないしは階層的な秩序がないとすれば、このような心理学的実験と言語学的実験の結果はたがいに矛盾すると言わなくてはならないだろう」(p.230)と言う。ここでフロイトやユング、あるいはインド哲学を引いているのは、狭い意味での「言語」すなわち印欧語の周縁にある、「言語」的な意味に回収されない広い「意味」の領域を指し示すためである。それらを含めるからこそ「言語学とは本質的には意味の探求である」(「原始共同体における思考の言語学的な考察」 p.40)と言い切れるのであり、その点において「人類学」の関心とも重なり合うことができる。

このように見ていくと、ウォーフが狭義の「言語学」の外に向けた「学際」の眼差しは、フリーコーが『言葉と物』(1966)で詳細に読み解いた、古典主義時代における「知のカテゴリー化」の成立史をまるで逆照射するようなアプローチであったことがわかる。しかし残念ながら、ウォーフは志半ばというよりもその入り口に立ったところでこの世を去る。その後の「言語的相対論」の不幸な運命——言語学に限らずさまざまな領域に身を置く研究者から一般大衆まで、安易な利用の横行、あるいは旧来の常識に依拠した重箱の隅をつつくような批判が重ねられた歴史は²¹、これもまた逆説的にその「学際」を志向する誘惑の抗いがたさ、それ自体の証であるようにも思える。ウォーフが晩年に、まさに「言語」を媒介にして「科学」や「論理」をターゲットにした論文を発表しつづけたのは、その関係を主題とした先駆的問いがそこにあったからに他ならない。

3. 認知科学と言語の新しい関係—ケアの意味論の構想

3-1 ウォーフの「負」の遺産の御しがたさ

今回試みたウォーフの再読は、必ずしも言語学の学説史上のウォーフへの「過去のもの」的な烙印への意義申し立てに止まるものではない。確かに、特に晩年の論文に見られる「学際」性は十分に注目すべき点ではあるが、神知学へのやや過剰な傾倒も含め、学問的な精度に欠ける議論であるとの批判が向けられるのは否めない——にしても、なぜウォーフへ極端な断罪が重ねられるようになったのか。

ガイ・ドイッチャーの『言語が違えば、世界も違って見えるわけ』(2010)も2000年代の著作でありながら、そこにウォーフへの厳しい言葉を見て取ることができる。しかしその多くは誤解に基づくものであり、ウォーフ自身の罪ではない。実はそのことはドイッチャーもわかっている——「いまでは、言語相対論が話題になりかけるだけで、大方の言語学者は居心地悪そうになり、『ウォーフの仮説』は概して神秘主義的哲学者や幻想家、ポストモダンの知ったかぶりについての言語学的タックスヘブンとなっている」(p.221)——そうかもしれない。だがそうした罪は「仮説」を「決定論」的に流布させた後世の人々にあるのであって、彼に帰するものではない。事実、ドイッチャーも基本的にはウォーフの仮説を出発点に実証への手がかりを得、また自らの考察も「後世の読者」に対して「無知」にしか見えないレベルにとどまっているかもしれないとエクスキューズしている²²。

ドイッチャーにこんな周りくどい道を選ばせたものは何か。その核心は彼のそもそもの問題の立て方にある——「私たちの社会の言語慣習が、言語を超えた、思考の諸相に影響を及ぼすこと」「言語が思考に及ぼす実証可能な影響」(p.382)——ここには相変わらずの「言語中心主義」がある。言語学者なのだから言語を真ん中(主題)に据え、そこから世界を捉えることは仕方ないのだろうか。それこそが悩ましき言語バイアスなのではないだろうか²³。レイコフは客観主義者たちのウォーフ批判(ホービ語の概念を英語で正しく記述した=ホービ語と英語は通訳可能=ウォーフの“両者の概念体系は通訳不可能”は誤り)を、相対主義の多様性によって切り抜けようとしたが、結局「言語学」の中にウォーフを切り詰めてしまう——同じ過ちが繰り返されている。むしろ「言語」はそれだけ「自明性」を有しているのである。

3-2 思考から「言語」を捉え直す

しかし一方、ドイッチャーはウォーフ以降のさまざまな実証を通じ、なにが知見として更新されたかを的確に整理する——「今日の言語学、認知科学の分野では、言語が思考に及ぼす影響を、それが真正の推論にかかわる場合にのみ有意と認める、という考え方が主流となっている。例えば、ある言語が、べつの言語の話し手なら簡単に解けるような論理問題を解く妨げになることが証明されれば、影響は有意と認められる。論理的推論にこのような制約的影響を及ぼす実例はいまだ提示されていないから、必然的にそれ以外の影響には意味がなく、人間は基本的に同じやり方で思考する」(p.383)——レイコフの通訳可能性/不可能性のテーゼを、チョムスキー的に書き直したような一文だが、ここに重要な示唆を見ることができる²⁴。これを逆に読めば、論理的(命題的)推論のレベルでは、ウォーフがこだわったような問題は起きないということだ。だが問題は、われわれの「思考」は、果たしてそうしたレベルのみで全て捉えられるものなのかという点にある。

天島大輔が『しゃべれない生き方とは何か』で、そして福島智が発達段階初期から障害を抱えた盲ろう者との出会いから論じた問題はこの点と重なる。それは「言語」と彼らが開発した「言語を模した手段」との隙間にあるもの、あるいは「言語」の手前にある「前言語的」とでもいうべき思考の領域から「言語なるもの」を逆照射すべき必要性である。天島と福島の方法ではいずれも「手で触れあう」ことによって意思が媒介される。そこにおいて言語が示す命題的な意味を超えた何かが伝わる／伝わらないことは十分想像可能であり、天島も福島も各々の著作でそのことについて言及している²⁵。

こうした問題に示唆を与えるような重要なことを、実はウォーフは述べている——「一般的な意味で『言語というもの』などは存在しないということすらあり得よう。『思考とは言語の問題である』という陳述は不正確な一般化で、もっと正確には『思考とは異なる言語の問題である』と考えなくてはならない。異なる言語というのは現に存在するものであり、一般化するとすれば『言語というもの』といった普遍的概念になるのではなくて『言語下のもの』とか『言語を越えるもの』とでも言うべき、もっとまともなもの、多分われわれが今『精神的』と呼んでいるようなものとは、仮に違おうとしても**全然無関係ではない**ようなものになるであろう」（「言語と論理」p.177）。こうして「言語」そのものが相対化される。するとこのアプローチによって「読み／書く」行為の対象であるもの以外にも「言語」に類する考察の光を当てることが可能になる。「ケア」の倫理的問題は、そこから開けていく——もしウォーフの仕事を「言語的相対論」と名指しすることが妥当だとするならば、この水準での理解でなければならない。

3-3 コミュニケーションからケアの意味論へ

ドイチャーも、そこに接近する手がかりを示してはいる——「言語はふたつの顔を持つ。公の役割を担うときの言語は、言葉を共通にする共同体がコミュニケーションを成立させるために合意した慣習の体系である。しかし言語にはもうひとつ私的な顔がある。それが話し手それぞれが心に取り込んできた知識の体系である。言語が効果的なコミュニケーションの手段であるためには、話し手の心に存在する知識の私的体系が、言語慣習の公的体系と密接に対応していなければならない。そしてこの対応があるからこそ、言語の公的慣習は、全宇宙でもっと魅惑的、かつもっともとらえがたい対象物、すなわち私たちの心、で起きていることを鏡のごとく映し出すことができる」（p.381）。

この言語の機能を公的な体系と私的な体系に分け、その間を媒介するものとしていかに機能するかを問う——今日の認知科学の水準はそのメカニズムにフォーカスするに至っている。アンディ・クラークは、『現れる存在：脳と身体と世界の再統合』（1997）でその「心と世界」の間にあるインターフェースの役割の記述に挑み、その結論として「言語」の問題に行きつく。「公共の言語はさまざまな意味で究極の人工物だ」（p.381）——クラークはあくまで「公共の言語」に限定して、議論を展開するが、その背後には思考の領域があり、それをコミュニケーションの手段たらしめる「公共の思考」と「私的思考」の間のループ（p.387）、あるいは学習ルーチンによってパターンが形成されていくという（p.399）²⁶。

この「パターン」という概念が、再びウォーフ的な意味で「言語」と「思考」と「世界」の

関係を結びつける。「パターン」は今や、包括的に社会・世界を問おうとするさまざまな学問的試みの中で用いられている。その中でも注目に値する一つのアプローチが、建築家クリストファー・アレグザンダーによる「パターン・ランゲージ」の思考法である。「パターン」を「ランゲージ（言語）」に先行する思考の枠組みとして措定し、組織内に存在する経験知や、暗黙的に共有されている価値観を言語化・体系化を志向する取り組みと言われている。アレグザンダーは都市構造の解析と「形の合成」による環境設計の理論を提言し、多くの建築家が影響を受けた²⁷。建築やデザインも生活環境を組み立てるものとするならば、媒介機能を担う営みであり、「言語」に近い意味作用を発揮する点においても、この領域で「パターン・ランゲージ」という概念が提起されたのは大変興味深い。しかも、アレグザンダーが着想に至る過程においては、チョムスキーの生成文法への批判があったという側面も見逃せない²⁸。

さらに言えば、近年、北欧発祥の「オープンダイアログ」という精神医療の現場におけるコミュニケーションの技法において、この「パターン・ランゲージ」の発想が取り入れられているという。この取り組みを提唱したヤコ・セイックラとトム・アーンキルは、バフチンのポリフォニーの概念を参照して「権威主義的な発話」に抵抗し、「狭まってしまった思考や相互作用のパターンを広げることに役立つ」(p.20)ものとして実践を繰り返している。これもまた「伝わらない」意味論的なバリアを、「言語」の手前にさかのぼることで取り除いていくアプローチと言える²⁹。

以前に比べて「ケア」の問題が社会の前面で議論される状況が整ってきた。しかしその多くは、規範や制度の次元を越えずに袋小路に陥っているようにも見える。そこに現れた天島や福島に、コミュニケーションの疎外形態からの回復として捉え返す眼差しを注ぎこむ意義は小さくない。それは「ケアと倫理」が重なり合う点であり、「生」の現実に立ち関係概念として他者性を認識する出発点でもある。レイコフによれば、当時ウォーフの主張は「倫理的な問題」として批判を浴びたのだが（『認知意味論』p.398）、今日、彼を縛り付けていた「言語学の頸木（サピアーウォーフ・レイコフの系譜学的位置づけ）」を改めて解いてみると、ポジティブな学際思想としての「逆転した読み」が可能になるとは、なんとも感慨深い。

註

¹ 天島、p. 57-8。天島と福島は、障碍のタイプが大きく異なるが、介助者の直接接触による方法を開発し（福島の場合は「指点字」）コミュニケーション・バリアを越えようとした点に共通性がある。

² 福島智「盲ろう児の言語発達と教育に関する文献的考察—「読み」の指導と想像力の形成を中心に」（『特殊教育学研究』, 32（1）,1994年）

³ この筆者の問題意識からウォーフをどのように再読するかに至る考察は、2022年度「第42回日本記号学会」セッション3「ケアする世界」で報告している。https://www.jassweb.jp/?page_id=2125

⁴ 「言語」研究の「学際」性については、例えば東京大学の「言語情報科学」専攻の取り組みが参照される（<http://gamp.c.u-tokyo.ac.jp/field/gengotai.html>）。

⁵ キャロルはそれを「探偵の仕事」という（編者解説、p.289）。

⁶ ウォーフのようにリスクに関する「専門的な知識」を持つ者にとっては『空の』缶こそおそらく一番危険なものである（p.96）が、一般人には「空の」という語は「危険がないこと」を暗示してしまう。しかしこのエピソードは、しかしその後展開されるホビー語とSAE（標準的英語）との「習慣性」に基づく含意のギャップへの議論の導入としてはあまり適切ではないように思える。

- 7 キャロルは言う「事実ウォーフは、思考の内容は思考の過程に影響するとか、あるいは、内容が違えば違った系列の過程が生じ、その結果、内容を考慮しないでは過程についての一般化は不可能であると信じていたようである」(編者解説、p.282)
- 8 キャロルはウォーフが研究の過程でサビアと出会ったことを知りつつ、「サビアがこの考え(ウォーフの言語的相対性の原理:筆者補足)の発展に関係していたことは絶対確実であるから、こう(「サビア=ウォーフの仮説」と:筆者補足)呼ぶことにする」と宣言する(編者解説、p.282-3)。その後のラベリングには、このキャロルのことばが大きく影響したように思われる。実際、サビアは原著『言語』(1921)の頃には明確にはウォーフ的な相対主義的態度は示していなかった(サビア同書における訳者・安藤貞雄の解説参照)ようであり、思想的にもこの二人をまとめて扱うには無理がある(池上嘉彦は『言語・思考・現実』の解説において、この二人の関係、および同時代の他の言語研究との関係を引用に基づき詳細に分析している)。
- 9 バルトの「断片」へのこだわりの背後に「言語への恐れ」があったことを石川美子は指摘する(『ロラン・バルト—言語を愛し恐れつづけた批評家』中公新書、2020)。
- 10 「生成文法か認知言語学か:『言語学戦争』から未来へ:教育と研究の未来(紀伊国屋書店営業総本部、2022) <https://mirai.kinokuniya.co.jp/2022/06/33950/>」しかし認知言語学の成立に大きく寄与したジョージ・レイコフのもとと生成文法理論から出発し、比喩とカテゴリーがいかに成立するかの研究から、認知科学との接点を見出す——「言語のあり方はそれをを用いる人間の認知の営みの傾向性との関係で動機づけられている」(辻幸夫編『認知言語学への招待』(大修館書店、2003) p.viii)
- 11 「ウォーフ以来、概念体系が通訳不可能であるのかどうかという疑問が繰り返し浮上している」(『認知意味論』、p.393)
- 12 本論において「レイコフ“ら”」と言う場合は、もっぱら認知言語学という言語学の「流派」に属する人々を意識している。したがって『レトリックと人生』以降度々協働していく哲学者マーク・ジョンソンはここには含まない。レイコフとジョンソンは二冊の共著のほか度々相互に知見を参照してきたが、二人の思想には大きな違いがあると考えている。この点についてはいずれ稿を改めて論じる。
- 13 但し『レトリックと人生』(25.客観主義的神話と主観主義的神話)の文中には、以下の文言がある——「客観主義が見落としているのは、理解は必然的にわれわれの文化的概念体系と相対的關係にあり、したがって真実も同様であるという事実である」(p.275)
- 14 ウォーフ自身は「言語的相対性」と訳すべきタームをおそらく使っていないかと思われる。近い意味で論じていた箇所を「科学と言語学」の中で確認できるのみである——「このような点でもっともとらわれるところが少ないといえるのは、きわめてさまざまな多くの言語体系に通じている言語学者であるということになろう。しかし今のところ、そのような立場にある言語学者は存在しない。かくして、われわれは新しい一つの相対性原理へと導かれていくことになる」(p.155)。
- 15 もちろんレイコフにそのつもりがないことは言うまでもない。しかし『認知意味論』で行った実証がその後重ねられ、ウォーフの仮説が(部分的に)覆されつづける運命を導いたことは否定できないだろう。
- 16 キャロルはこの点を繰り返し指摘している(p.247(宗教に対して)、p.270(インド哲学に対して))。
- 17 「言語と精神と現実」では直接的にアインシュタインの名をあげている(p.210)。
- 18 「習慣的思考および行動と言語との関係」はサビアへの追悼論文集のために書かれた(編者解説、p.282)。
- 19 「言語というものがいかに重要であるとはいえ、私の考えでは、言語の背後には、伝統的に『精神』と呼ばれてきたようなものが存在しないとは言いきれないのである」(「言語と論理」、P.177)
- 20 この「言語」に対する位置関係——特に「下」としての物理的、聴覚的な面(「言語と精神と現実」、p.193)は、サンスクリット語の「ナーマ(名)」の位置に相応し、それより「上」の「マナス(心)」「ルーパ(形相) / アルーパー(無形相)」の層がパターンとして「意味」構成されていることの発見につながっている(p.200-202)。
- 21 ウォーフにどのような批判が向けられてきたのか、ドイッチャーの著書は、それを概観するという点においては一読すべきであろう。しかしその中には事実面に即していない点も見受けられる(ウォーフはホービ語についてアリゾナで現地調査をしなかった(p.239)とドイッチャーは言うが——キャロルの解説によれば1938年に現地に滞在している(p.265))。
- 22 ドイッチャーは「われらが無知を許したまえ」と言う——「将来、神経回路網がDNAの構造と同様に透けて見えるようになり、科学者がニューロンのやりとりを立ち聞きして、なにが話されているのかを正確に理解できるようになれば、MRI スキャンの最先端ぶりも、マウスの尻尾を切り落とすのに劣らず滑稽に見えてくるだろう」(p.389)——しかしそうだとしたら、ウォーフに彼が向けた誹謗

表現（邦訳では「ウォーフの派手な主張の大半はいんちきである」（p.221）など）は行き過ぎに思える。

²³ ドイツチャー邦訳巻末の解説で今井むつみは、「彼らを迷わせたのは、自分の話す言語は世界の自然な切り分けを反映していて、それ以外の切り分け方はいないという信念バイアスだ」（p.396）というが、むしろそれ以上に、“信念”を相対化したところでさらに再帰的に思考を拘束する「言語」自体のバイアス性を問題にすべきである。

²⁴ レイコフは「真理条件を保持する翻訳可能性の基準は真剣に考慮するにはあたらぬ」と言って、通訳可能性の基準から「翻訳」を外した（『認知意味論』、p.411）。

²⁵ ダニエル・ブーニューは『コミュニケーション学講義』で、この問題をパラドックスとして——発話内容を遮る発話行為、あるいは「垂直的矛盾」として論じる（p.43）。また伊藤亜紗は『手の倫理』において、この身体的接触が生み出す意味生成過程を積極的に論じている（第4章）。

²⁶ クラークは、この学習過程と脳の可塑性を関連づけて論じる。言語はここにおいてネットワーク的に環境適応を媒介する——それは「間断のない脳・身体・世界の相互影響（『現れる存在』、p.425）としてそれらにまたがるエージェンティ性の概念を提起する。この認知科学の進展が、このように言語を再帰的に位置づけるさまにこそ、ウォーフの構想の現代性を読むべきだろう（但し、クラークはウォーフには言及していない）。

²⁷ アレグザンダーに影響を受けた日本の建築家としては磯崎新、難波和彦らが挙げられる。

²⁸ 「パタン・ランゲージは言語構造の最も興味深い部分である意味論的（セマンティック）な構造を扱うもので、まだ数人が研究を始めたばかりです。『火』に『燃える』や『赤』や『情熱』などの単語を結びつける構造は、パタン・ランゲージの中でパタン同士を結びつけている構造とよく似ています。パタン・ランゲージは生成文法というよりもむしろ、いまだに抽象化されていない言語の中心構造に似ています」（『クリストファー・アレグザンダー』、p.75）——さらにアレグザンダーは「客観主義と主観主義を超えるパラダイム」（p.83）として自身の構想に、レイコフ的な位置づけを与える。

²⁹ 井庭崇・長井雅史のアプローチ（『対話のことば』）を指す。拙論「真理とコミュニケーション——「フェイクニュース」を問うための思想地図の試み」（東海大学紀要文化社会学部6号）では、フーコー、デリダ、クリステヴァらの思想の延長線上に「オープンダイアログ」の実践を位置づける。

引用文献

John B. Carrol, ed. *Language, Thought, and Reality: Selected Writings of Benjamin Lee Whorf*, Martino Fine Books, 1956=2011

ベンジャミン・リー・ウォーフ『言語・思考・現実』池上嘉彦訳、講談社学術文庫、1993

Randy Allen Harris. *The Linguistics Wars Chomsky, Lakoff, and the Battle over Deep Structure* — 2nd, Oxford Univ. Pr., 2021

エドワード・サピア『言語』安藤貞雄訳、岩波文庫、1998

ジョージ・レイコフ／マーク・ジョンソン『レトリックと人生』渡部昇一／楠瀬淳三／下谷和幸訳、大修館書店、1986

ジョージ・レイコフ『認知意味論』池上嘉彦／河上誓作ほか訳、紀伊国屋書店、1993

天島大輔『しゃべれない生き方とは何か』生活書院、2022

福島智『盲ろう者とノーマライゼーション—癒しと共生の社会をもとめて』明石書店、1997

石川美子『ロラン・バルト—言語を愛し恐れつづけた批評家』中公新書、2020

辻幸夫編『認知言語学への招待』大修館書店、2003

ガイ・ドイツチャー『言語が違えば、世界も違って見えるわけ』椋田直子訳、早川ノンフィクション文庫、2022

ダニエル・ブーニュー『コミュニケーション学講義—メディアロジーから情報社会へ』水島久光監訳、西兼志訳、書籍工房早山、2010

伊藤亜紗『手の倫理』講談社、2020

アンディ・クラーク『現れる存在一脳と身体と世界の再統合』池上高志／森本元太郎訳、早川ノンフィクション文庫、2022

スティーブン・グラボナー『クリストファー・アレグザンダー建築の新しいパラダイムを求めて』吉田朗／辰野智子／長塚正美訳、工作舎、1989

ヤーコ・セイックラ／トム・エーリック・アーンキル『オープンダイアログ』高木俊介／岡田愛訳、日本評論社、2016

井庭崇／長井雅史『対話のことばオープンダイアログに学ぶ問題解消のための対話の心得』丸善出版、2018